

授業アンケート結果 報告書

(平成 23 年度(2011 年)～平成 25 年度(2013 年) 3 年間まとめ)

教育開発・研究推進中核センター教育開発部門

1. はじめに

本学では、各教員の授業形態・質の向上や授業内容の充実を目指して毎年、前期、後期に 1 回ずつ常勤、非常勤を含めて全ての教員の各担当科目で受講学生を対象として無記名で授業アンケート（図 I）を実施している。授業アンケートは、「学生自身の授業の取り組み」に関する質問を 3 問、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」に関する質問を 7 問、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」に関する質問を 2 問、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」に関する質問が 1 問である。さらに、アンケート用紙の裏面には、学生の意見を直接記入できる欄があり、各教員の授業に対する学生の「生の声」を反映させることができる。今回集計した 2011-2013 年度に関しては、実習に対するアンケートは含まれていないので、講義・演習形式の授業に関するアンケート結果となるが、平成 26 年度からは、実習を含むすべての授業・演習・実習でアンケート調査を行っている。アンケートに授業内容を適切に反映させた回答を受講者に促すために、最終試験前の 15 回目（薬学科では 12 回目）までに授業担当者の判断で授業時間内に行なっている。

授業アンケートの結果は集計され、授業科目ごとに各質問項目に対する 4 段階評価の度数分布図表やレーダーチャートを記載して各授業担当教員に返却している。4 段階評価点数が 8、3、2、0 点であるため、各授業科目に対する評価が厳格に表示されることになる。また、FDの一環として、学科内ですべての教員の担当科目の集計結果を閲覧することができるため、各教員の授業の改善や向上に役立てることができる。平成 17 年度(2005 年度)以降、授業アンケートを実施して、このような授業アンケート結果に対するフィードバックへの取組みを全学的に実施してきたが、この度、その結果を集計・解析し、今年度より授業アンケートの全学的な結果をまとめた報告書を大学のホームページに掲載して情報公開に取り組むこととした。

2. 授業アンケートの実施方法

アンケート内容と実施の変遷について：

本学では、平成 17 年度(2005 年度)より授業アンケートを実施している。授業アンケートの質問項目は適宜見直され、特に平成 22 年度(2010 年度)から教員が授業を改善できるよう質問項目の見直しを行い現在に至っている。また、授業アンケート結果を年度間で比較し教員の授業改善に役立てるために、授業アンケートの質問項目は、平成 23 年度～平成 25 年度(2011 年度～2013 年度)も同様のものを使用している。各年度とも前後期に各 1 回、年 2 回アンケートを実施している。

アンケート対象学生数と教科について：

各年度の授業アンケートの対象となった教員数、科目数、学生数を下記※表 1 にまとめた。

※ 表 1

アンケート実施		科目数	専任教員数	非常勤教員数	教員数	アンケート回収数	受講生数
平成 23 年	前期	276	101	35	136	12778	14916
	後期	285	100	33	133	10881	13845
平成 24 年	前期	302	97	34	131	13371	16248
	後期	266	93	28	121	10962	13918
平成 25 年	前期	302	101	23	124	13331	15767
	後期	272	100	26	126	10898	13435

アンケート集計・解析方法とそのフィードバック方法について：

その集計ののち、各質問項目に対する度数分布表（4 段階評価点数が 8、3、2、0 点）を作成した。大学全体、学部、学科、各科目単位で、質問項目を計算し、一覧(平均値一覧表)にまとめた。授業アンケート集計表（度数分布表・評価レーダーチャート）所属学科科目をまとめて学部長へ配付し、その後学科長より各学科において、面談等のフィードバックをしながら各教員に授業アンケート結果を返却するようにした。平成 22 年度(2010 年度)以降、授業アンケート結果を適切に授業改善につなげられるよう授業アンケート結果に対するフィードバックへの取組みを全学的に実施した。そのため授業担当者に対する学科長の面談などのフィードバックが行えるように配慮し、平成 22 年度実施分より授業アンケート結果を学科長に渡し各授業担当者に返却するようにした。具体的な内容や方法は課題として残されている。学科毎に専門が異なり授業方法なども多種多様なため、当面は各学科において適切な方法でフィードバックに取り組んでいる。今後全学統一したフィードバックの方法を検討していく。

3. 授業アンケート結果

授業アンケート結果については、アンケート内容である「学生自身の授業の取り組み」、「学生から見た教員の授業に対する取り組み」、「授業に対する学生自身の理解度・達成度」、また、総合評価として「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」について以下に全学的結果から各学科結果について個々に記載する。全学的結果については、学科間の相違に、また、各学科では学年間や前期と後期の相違に着目して、アンケート結果をまとめた。

全学的アンケート結果（図Ⅱ）

「学生自身の授業の取り組み」

調査した各年度や前期・後期に関わらず、各学科での授業で4回以上欠席する学生はほぼ10%以下であるが、前期後期ともにスポーツ健康福祉学科、臨床福祉学科、子ども保育福祉学科、動物生命薬科学科では他学部比べて1-5回欠席する学生の割合が多かった(Q1)。また、1時間以上の予習復習を行っている学生は、どの学科でもほぼ10%前後に留まっていたが、特に、子ども保育福祉学科、視機能療法学科、臨床福祉学科ではほとんど予習復習をしない学生割合が他学部比べて多かった(Q2)。学生の授業に対する意欲は、各年度や前期・後期に関わらず、スポーツ健康福祉学科、視機能療法学科、言語聴覚療法学科、子ども保育福祉学科では比較的他学部より低いと感じられた(Q3)。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスに沿った目標や習得すべき事項の説明(Q4, 5)、授業開始時間や授業雰囲気確保に対する教員の努力や学生の授業への参加を促す努力(Q6, 7, 8)、また、わかりやすい講義資料の作成や説明が行われたか(Q9, 10)については、調査した各年度や前期・後期に関わらず、ほとんど90%以上の学生が教員の努力を感じているが、スポーツ健康福祉学科や視機能療法学科では、年度により若干不十分であるとする学生割合が多いようであった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

学生の理解度や学習意欲の高まり(Q11, 12)に関しては、平成23年度(2011年度)から平成25年度(2013年度)にかけて徐々に改善が見られるようであるが、視機能療法学科やスポーツ健康福祉学科では他の学科より学生の理解度や意欲が低いようである。しかし、全体として学生のほぼ90%以上が授業を理解して、意欲があったと回答している。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

平成23年度(2011年度)から平成25年度(2013年度)にかけて前期・後期に関わらず、徐々に授業に意義があまりなかったとする学生数が減少している。しかし、視機能療法学科やスポーツ健康福祉学科では比較的授業に意義があったとする学生数が低下している。

臨床福祉学科アンケート結果(図Ⅲ)

「学生自身の授業の取り組み」

すべての年度において、前期よりも後期に欠席が増える傾向が見られた。特に4年生の4～5回の欠席は後期に大幅に増加する傾向にあった。また、1回の授業に対する予習復習に関しては、1時間以上の割合は各年度、学年を問わず10%前後であり、「ほとんどしていない」割合は40%～50%で、過去3年間大きな変化は見られなかった。「学習に意欲的に取り組んでいるか」については、年度を追うごとに増加傾向が見られ、平成23年度（2011年度）では、1年生の前期と4年生の後期で50%が「当てはまる」と回答していた。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に対する取組において、「シラバスに沿った授業」「目標や習得事項の説明」「授業開始時刻」「私語への注意」「授業参加へ促し」「わかりやすい説明」「講義資料」のすべての項目で「あてはまる」「ややあてはまる」が90%程度であり、年度や学年ごとの大きな変化は見られなかった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

学生の「授業に対する理解度・達成度」「学習意欲の高まり」については、年度学年を問わず90%が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答していた。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

この項目に関して、年度学年問わず90%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答していた。平成23年度（2011年度）平成24年度（2012年度）には「あてはまらない」と回答した学生がわずかに見られたが、平成25年度（2013年度）にはほとんど見られなかった。

スポーツ健康福祉学科アンケート結果（図Ⅳ）

「学生自身の授業の取り組み」

本学科学生の授業への取り組みについて、【欠席状況】は学年が上がるに従って欠席回数が多くなる傾向が見られる。また1年生の欠席0回学生を年度毎の前後期で比較すると、どの年度においても欠席0回者は前期に比べ後期が減る傾向があった。このことから学生によっては学生生活が慣れるに従って、欠席回数をコントロールし授業を休んでいるという可能性が考えられる。【予習復習時間】では年度や学年によってバラつきが大きい。しかし各年度の学年ごとに前後期の比較をすると予習復習時間はほぼ変わらない結果であった。また平成23年度（2011年度）1年生は平成25年度（2013年度）3年生であり、縦断的に比較した場合も予習復習の時間の変化はほぼないことから、学年が上がるにつれ専門的な内容になり自己学習を積極的にするというよりは、予習復習の習慣がある学生や必要性を感じている学生は予習復習を行っているが、そうでない学生は行わないまま学年が進行している可能性があると考えられる。【授業中の取り組み】では、80%以上の学生は意欲的に授業に取り組もうとしているが、各年度とも「あてはまらない」と回答した学生は0にはならない結果であった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

教員の授業への取り組みに関する項目について全項目とも80%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」に該当している。【Q5 授業の目標や習得すべき事項を説明した】と【Q9 わかりやすい説明や指導をしたか】の「あてはまる」「ややあてはまる」項目が非常に良く似た結果を示し、本授業で習得すべき項目を具体的に提示することが学生にとってはわかりやすい授業であると考えられる。一方で、【Q8 学生に授業への参加をうながす（質問等）】の「あてはまらない」がある場合では、【Q7 私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保つ】や【Q5 授業の目標や習得すべき事項を説明した】、【Q6 授業の開始時間を守っていた】などの項目で「あてはまらない」がある傾向が見られる。このようなことから、教員が積極的な授業の雰囲気作りや取り組みが学生の学ぶ環境づくりのためには必要であると考えられる。学生の年次変化で見ると、回答状況は学年進行によって回答傾向はあまり変化していないようにみうけられた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

理解度・達成度については80%以上の学生は「あてはまる」「ややあてはまる」結果であった。【Q11 授業の目標や習得すべき事項の理解】と【Q12 学習意欲の高まり】の回答結果は非常に似た結果であった。授業の目標や何を学ぶべきかを理解できている学生は学習意欲が高まっているが、授業での習得すべき事項をきちんと理解できず授業を受けている学生は学習意欲が高まらないということを示していると思われる。このことは、次の設問である【意義がある授業であるか】にもつながり、授業の【理解度】や現時点での【学習意欲の高まり】が将来の資格取得の為の学習意欲に大きく影響する可能性もあると考えられる。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業の意義について学生は、80%以上の学生が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答している。特に2011年度と2013年度の後期では4年生の全員が「あてはまる」「ややあてはまる」と回答し授業に意義があったとしている。4年生の後期では資格試験等の模試が行われたり、また卒業が近くなることから授業内容の重要性や学ぶことの意義を実感する結果になったとも考えられる。言い換えれば、1-2年生では資格を取得したい意思はあっても、まだまだ資格試験等は遠い存在であり、実感がわからないことから大学での授業の意義や重要性を見いだせていない可能性がある。早い段階で学びに対する動機付けや学習意欲を上げる工夫が「学生自身にとって意義のある授業」につながり、今の学びが将来の資格取得に結びつくことを指導していく必要があると考えられる。 _____

子ども保育福祉学科アンケート結果（図Ⅴ）

「学生自身の授業の取り組み」

「Q1. 授業を何回欠席したか。」平成 24 年度（2012 年度）前期の 1 年生だけが 1～3 回欠席が約 9 割で目立っていたが、翌平成 25 年度（2013 年度）前期の 1 年生では欠席 0 回が 9 割以上で改善された。他は 3 回までの欠席が 8 割前後に抑止されている。4 年の後期は就職活動等の影響で 4～5 回欠席が 2 割近くに増加している。「Q2. 1 回の授業に対して、平均どのくらいの予習復習をおこないましたか。」全体としては 30 分から 1 時間が 2 割前後。2 年で減少し、3 年後期と 4 年前後期で 2 割前後に持ち直している。2 年の「中休み」には何か対策を講じる必要がある。「ほとんどしなかった」と「30 分未満」が全体で約 8 割。「ただ授業に出て、漫然と聞いているだけ」という実態があり、実際、理解定着度も低い。予習復習の方法の具体的な指導を実施したい。「Q3. 授業中居眠り、私語、遅刻、早退なく、学習に意欲的に取り組みましたか。」「あてはまる」が 4～5 割。特に 3 年間で 4 年生の状況が 1 割以下から 5 割以上に改善された。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

「Q4. 担当教員は、シラバスにそって授業を行いましたか。」「Q5. 担当教員は、授業の目標や習得すべき事項を、毎回説明していましたか。」共に「あてはまる」（7 割）と「ややあてはまる」（2 割）合計で 9 割を達成。「Q6. 担当教員は授業の開始時刻を守っていましたか。」9 割弱が「あてはまる」と回答。「Q7. 担当教員は、学生の私語に注意を促すなど授業の雰囲気を保っていましたか。」「Q8. 担当教員は、学生に授業への参加を促していましたか（質問等）。」共に同傾向で、3 年間で徐々に改善され、平成 25 年度（2013 年度）は「あてはまる」が 8 割強。「Q9. 担当教員は、わかりやすい説明や指導をしていましたか。」「あてはまる」が平成 23 年度（2011 年度）の 5 割から 2013 年の約 8 割に改善。ただし、平成 25 年度（2013 年）前期の 2、4 年生の「あてはまる」が 5 割強に再び減少。原因は指導体制の変更か。「Q10. 担当教員の講義資料は適切でしたか（教科書を含む）。」全体として約 8 割が「あてはまる」。平成 25 年度（2013 年度）前期の 2、4 年が 6 割に留まる。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

本項目は「Q11. 授業の目標や習得すべき事項を理解できましたか。」及び「Q12. 授業で学習意欲が高まりましたか。」の二つの問いから成る。まず Q11 について、11 年を除いていずれも 90% を維持していることから、シラバスや授業内容の改善に関する効果が表れ始めているのではないかと考えられる。他方、「あまり当てはまらない」が高学年ほど増えている点にも注目が必要であろう。授業に対する要求水準や批判精神が身に付いている面もあるだろうが、どのようなものであれ不満の芽があるならばそれを精査していく必要があると考える。Q12 についても同様に、11→12→13 と授業を受けた学生の学習意欲が向上しているのが読み取れる。4 年次の評価の改善が見られるのが成果である。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

「Q13. 授業は意義あるものでしたか。」本問は総合的な授業評価を聴く、最も本質的かつ重要な問いとして位置づけられよう。11 年に比べ、12・13 年において「あまりあてはまらない」が目に見えて減少、さらに「ややあてはまる」も減少、はっきりと「あてはまる」と言い切る回答が増えていることがわかる。13 年における満足度は前・後期ともに 90% を超えていることから、大学全体が一丸となって取り組む FD 活動が功を奏して各教員の授業改善及び学科としてのフォローアップの充実が図られ、その結果として満足度が向上したものと史料される。

作業療法学科アンケート結果（図VI）

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況は、0 回が 70%，3 回までを含めると 95%程度と概ね良好である。ただし、2 年生は欠席が若干増加する傾向がうかがえる。2 年生で欠席が多くなるのは意識の低い再履修者の影響ではないかと考える。逆に、3 年生は、臨床実習を控えているため勉学に対する意識が変わり、欠席は少なくなる。

予習復習について、1 年生から 3 年生までは 1 時間以上が 15%前後と少ない。特に 1 年生はほとんどしないと回答した者が半数近くを占めている。4 年生では 1 時間以上と回答したものが 70%前後となる。1 年生には高校時代に予復習の習慣がないために少なく、4 年生は過程の大半が臨床実習であるために高いと考える。

取り組み姿勢では、「あてはまる」「ややあてはまる」と回答したもので 80%以上を占め、学年が進むに連れてその傾向は高くなる。やはり、学年が進むとともに勉学に対する意識が変わってくるのではないかと考える。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスについて、概ねシラバスどおりの授業進行であると回答している。学年が進むにつれてシラバスに添っているとの回答が多くなる。教員の授業内容説明についても同様で、学年が進むにつれて「あてはまる」との回答が多くなる。私語等に対する注意も、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年で 90%を超えている。教員の授業に対する取り組みも、概ね良好で「ややあてはまる」まで含めると全学年で 90%を超えている。ただし、私語が見られるのは 1 年生だけで、2 年生以上では私語はほとんど見られない。

授業参加への促しについても同様であり、学年が進むにつれて「あてはまる」との回答が多くなる。教員の説明のわかりやすさ及び講義資料についても同様である。ただし、教員に対する評価で、13 年の 2 年生だけは全体的に低い。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業内容の理解について、「ややあてはまる」を含めると全学年で 90%前後だが、「あてはまる」だけを見ると 1 年生が低い傾向が見られる。また、学年が進むにつれて理解度は高まる傾向にある。3 年生以上になると「あてはまらない」との回答は 0 になる。ただし、13 年の 2 年生だけは特異的に低い。学習意欲についても同様で、「ややあてはまる」を含めると全学年で 90%前後である。特に 4 年生については高い意欲が見られる。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

講義の意義について、「ややあてはまる」を含めると全学年で 90%前後だが、「あてはまる」だけを見ると 1 年生と 2 年生が低い年がある。しかし、学年が進むにつれて「あてはまる」とする回答がおおくなる。特に平成 25 年度（2013 年度）の 2 年生は特異的に低い。教員の授業に対する取り組みが、日々進歩していると言ってもそれほどドラスティックな変化ではない。仮に後退していたとしても、やはりドラスティックな後退は考えられない。このクラスによる授業評価はこのクラス独自の雰囲気を表しているものと考ええる。事実、このクラスの成績は芳しくない。

言語聴覚療法学科アンケート結果（図Ⅶ）

＜総評＞

本学科は平成 24 年度（2012 年度）に新カリキュラムに移行され、科目数の減少及びシラバスの整備を行った。平成 25 年度（2013 年度）では 2 年生までの実施であり、アンケート結果からの読み取りには限界があるが、予習・復習の時間数、授業に対する意欲ならびに内容の理解に関して、あまり反映された傾向にはない。また、前期に比べ後期になると、学習意欲が高まる傾向にあることや、1・2 年生に比べ 3・4 年生になると、意欲の高まりや理解が深まる傾向にあった。

新カリキュラムに移行され、学生は時間的に余裕が生まれ、主体的学びの環境が与えられたわけであるが、教員側からのより適宜適切な具体的な介入が必要なことを、アンケート結果は示している。本学科の特徴として、3 年生に学外臨床実習、4 年生に国家試験対策があることを踏まえると、1・2 年生での確実な学びの習得は必須である。教員はさらに授業工夫を行い、学生の評価を厳格化することも必要となってきた。

「学生自身の授業の取り組み」

出席状況ならびに学習意欲は、3 学年ともにとても良好である。1 回の授業に対する予習復習は、3 学年ともに、ほとんどしない、または 30 分未満が 6~7 割を占める。前期に比べ後期の方が、若干学習時間が増える。いずれにしても、個人差が大きいこと、また科目によって異なることを教員として実感するところはある。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

教員の授業に対する評価は、3 学年ともに良い。これは、学生が自身の学習への取り組み状況を評価しているのと同様であった。教員のシラバス整備が学生の学習意欲に繋がっているのか、学生の学習意欲が教員の授業工夫に繋がっているのか、双方向の作用の結果とも読み取れる。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

理解・達成感ともに、学年が進むほどに、理解が進み達成感を得ている傾向にある。あてはまる、ややあてはまるを合わせれば、9 割を超える。専門領域の理解度や達成感が持てることは、学生自身が言語聴覚士を目指すという職業観をもって学び始める道のりを示していると思われる。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

1 年生より、ややあてはまるを含めると 9 割程度が意義あると答えている。さらに学年が進むにつれて、あてはまると回答する者が増え、意義を強く感じて学んでいる。③と同様に、学年を重ね言語聴覚士を目指すことの目標が明確になっていく結果であろう。

視機能療法学科アンケート結果（図Ⅷ）

「学生自身の授業の取り組み」

※ 設問 Q1～Q3 について

授業の出席状況について、すべて出席した学生の割合は全学年では 67～77%であり、3・4 年次より 1・2 年次で出席率が低く、1・2 年次では前期よりも後期に欠席が増加する傾向にあった。また、日々の授業に対する取り組み姿勢については、授業中の居眠りや私語はなく学習に意欲的に取り組んだと回答した割合が 75～80%であり、概ね真剣に取り組んでいることがうかがえた。出席状況や授業への取り組み姿勢については、年度による変化はあまり認められなかった。予習復習等の自己学習については、学年が上がるにつれ 1 時間以上の自己学習を行っている学生の割合が増加しており、年々増加傾向にある。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

※ 設問 Q4～Q10

教員の授業に対する取り組みについて、90%以上の学生がシラバスに沿った授業展開であり、毎回の授業目標や習得すべき事項が説明されていたと回答していた。各科目において、授業の一般目標や到達目標、成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施により、学生・教員ともにシラバスをもとにした授業展開が年々実践できつつあると思われた。また、適切な講義資料の準備、質問等による授業参加の促進や学生の私語に対する注意等、授業運用及び環境設定等についても、肯定的な回答が 90%以上であった。一方で、授業中のわかりやすい説明や指導に関する項目では、年々、肯定的な回答が増加しているものの、5～8%程度の学生が授業中の説明に対してわかりにくいと感じており、改善の必要があると思われた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

※ 設問 Q11～Q12

授業に対する学生自身の理解度については、概ね理解できているが、2 年次で理解できていない学生の割合が多い傾向にあった。2 年次で専門科目が増加することが関係しているものと思われた。しかしながら、理解できていないと答える学生の割合は年々減少傾向にあり、平成 24 年度（2012 年度）では 21%であったのが、平成 25 年度（2013 年度）では 12%まで減少しており、他の学年においても 5%程度まで減少している。学習意欲に関しては、各年度ともに学年が上がるにつれて高い傾向にあった。一方で、意欲が高まらないと回答する学生の割合が 1・2 年次で高い傾向にあった。年々減少傾向にあるものの、平成 25 年度（2013 年度）では、1 年次 9%、2 年次 12%、3 年次 4%であった。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

※ 設問 Q13

授業が意義あるものであったと回答した学生の割合は、平成 23 年度～平成 25 年度（2011 年度～2013 年度）で、1 年次は 90%程度とあまり変化がなく、2 年次は 85%から 96%、3 年次は 95%から 97%であった。学年が上がるにつれ、授業を意義あるものと回答する学生の割合が高い傾向にあった。他の項目とも関連して、教員の授業運用および授業展開、学生自身の取り組み姿勢や意欲について、全体的に 2 年次で満足度低下あるいは否定的な回答が多くなる傾向にあるため、改善する工夫が必要であると思われた。

臨床工学科アンケート結果（図IX）

「学生自身の授業の取り組み」

授業の欠席回数は3年間において、1・2・3学年ともに前期より後期の方が減少している傾向がみられた。予習復習の時間に関して、3年間の全学年において、30分以上予習復習をおこなったものは全体的に50%以下の傾向が見られた。また、「ほとんどしなかった」の割合が第4期生に特に多く、このことは本期生の国家試験不合格者が最多であったことに関連しているのかもしれない。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

各年度の前期・後期の全学年を通して、Q4～Q10に関して「当てはまる」が全体的に50%以上を占める傾向が見られた。また、Q4～Q10における「あてはまる」などの評価内容は、各年度の同一学年では類似した傾向が見られた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」と比べて、Q11～Q12における「あてはまる」の割合が減少する傾向が見られ、教員の授業に対する取り組みが学生自身の理解度・達成度には必ずしも反映されていないと考えられる。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

Q12における「当てはまる」などの評価内容は、ほぼ「授業に対する学生自身の理解度・達成度」と同じ傾向が見られ、授業に対する学生自身の理解度・達成度が授業の意義の存否につながる傾向が見られた。なお、各年度、前期・後期、学年において、「あてはまる」と「ややあてはまる」を合計した割合は90%以上であり、また、平成23年度（2011年度）は平成24年度（2012年度）及び平成25年度（2013年度）と比較して「ややあてはまる」が減少し「あてはまる」が増加している傾向が見られた。

薬学科アンケート結果（図X）

「学生自身の授業の取り組み」

いずれの年度、いずれの学年においても、欠席 0 回および 1~3 回を合わせると 90%を超えていた。また高学年になるほど出席率が高い傾向にあることが分かった。

予習・復習については、1 時間以上行った学生は概ね 10%台前半、一方ほとんどしなかった学生が 30%以上で、高学年になるほどその割合が高くなる傾向が見られた。

「学習に意欲的に取り組みましたか」という設問に対しては、いずれの年度、いずれの学年においても、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると 80%を超えており、良好であった。

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

シラバスに沿った講義かどうかについての設問（Q4）では、「あてはまる」、「ややあてはまる」を合わせると 80%を超えており、ほとんどの教員がシラバスに沿って講義を進めていることがうかがえた。授業の開始時刻も守られているとの回答が圧倒的に多かった。授業中の静穏な雰囲気が保たれているかについての設問も、概ね高い評価が多かった。平成 23 年度（2011 年度）後期では高学年で Q4~Q10 についての回答で、「あてはまる」が少なくなっていた。また年度間で比較すると、教員に対して厳しめの評価をする学年とそうでない学年があることがうかがえた。全般的に、「あてはまる」、「ややあてはまる」のポジティブな評価が圧倒的に多く、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」のネガティブな評価はわずかであった。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

授業に対する学生自身の理解度・達成度についての設問では、ポジティブな評価がほぼ 90%前後で、かなり多かったものの、「あてはまる」の割合はそれほど高くなかった。学生の意欲をいっそう引き出すような授業の工夫や教員側の対応が求められるのではないだろうか。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

授業が意義のある授業であるか否かについては、ポジティブな評価が、いずれの年度、いずれの学年においても 90%を超えていた。年度間および学年間の比較では、一定の傾向は認められなかった。

動物生命薬科学科アンケート結果（図XI）

「学生自身の授業の取り組み」

平成 23 年度～平成 25 年度（2011 年度～2013 年度）の前後期の 1 年生の授業欠席回数は、他学年と比較して少ない傾向であった。2 年生および 3 年生の欠席回数は 1 年生よりは多い傾向で、4 年生はいずれの年度・学期においても欠席回数が他学年よりも多い傾向がみられた。

一部の例外を除き、ほとんどの学年および年度・学期において、予習復習の時間は少なく、「30 分未満～ほとんどしなかった」と回答した学生は 50%以上を占めた。特に 4 年生後期ではその割合は、平成 23 年度（2011 年度）は約 80%、平成 24 年度（2012 年度）は約 60%、平成 25 年度（2013 年度）は 100%と高かった。ここで、例外として、平成 24 年度（2012 年度）前期 4 年生および平成 25 年度（2013 年度）前期 4 年生では 1 回の授業の予習・復習を 30 分以上した学生が 60%以上～約 80%、授業中居眠りなどなく学習に取り組んだ学生が 60%以上～100%見られた。（この点は 4 年生のアンケートの総数を知りたいと考えています。片寄あり？）

「学生から見た教員の授業に対する取り組み」

学生から見た教員の授業に対する取り組みとして、シラバスは年度を経るごとにシラバスにそった授業の比率が多くなっていた。その他の設問では、1 年生に教員の授業に関する取り組みが「あてはまらない～あまりあてはまらない」と回答が他の学年に比して多く見られたが、上級年になるとその割合は減少する傾向が見られた。

「授業に対する学生自身の理解度・達成度」

いずれの学年および年度・学期において、「授業の目標や習得すべき事項の理解」は「授業での学習意欲の高さ」とほぼ正の相関を示していた。

特筆すべきは、4 年生の前期平成 23 年度～平成 25 年度（2011 年度～2013 年度）では、目標や習得すべき事項を理解できたかの回答の「あてはまる～ややあてはまる」が 100%に対して、授業で学習意欲もたかまっていたか、の回答でも「あてはまる～ややあてはまる」が 100%であった。このことから学生自身の高い学習意欲は高い理解度・達成度をもたらしていた。

「学生自身にとって授業が意義のある授業であるか否か」

1 年生では毎年平成 23 年度～平成 25 年度（2011 年度～2013 年度）「あまりあてはまらない～あてはまらない」が約 10%代みられるが、上級年になるとその割合は減少する傾向があり、4 年生になるといずれの年度においても「ややあてはまる～あてはまる」の割合がほとんどであった。

このことから、1 年生では学生自身にとって授業の意義がやや低いものの、上級年になると授業が意義あるものであると考えていた。

4. おわりに

実施している授業アンケートは、学生の授業に対する自身の学習の取り組みや意欲を理解するために、また授業への意識やあり方についてアンケート結果をもとに教員が授業を改善できるように質問項目を設定し実施をしている。そのためアンケート結果をみて授業を振り返り改善をしていくことが望まれる。学生からみた教員の授業に対するとりくみにおいては年々上昇の傾向にあり、授業改善の成果を窺がえる。

一方このアンケート結果を授業改善にフィードバックする際にはいくつかの点を考慮に入れながら行う必要がある。授業アンケート結果に関する結果から、受講者数が多くなるにつれて評価点が下がる傾向にある。良い授業をしていながらアンケートの評価点が低くなることもある。学生の受講数等も含め見極める必要がある。

授業アンケート結果を更に授業改善に活用していくことが今後の課題である。アンケート結果を適切に授業改善へつなげる為には更に全学的に適切なフィードバックへの取り組みが必要である。